

〈différance〉の戯れ

荒木正純

Jacques Derrida は、彼が戦略的に配備をした戦略的武器 〈différance〉について、1968年1月27日に Société française de philosophie で講演をおこなっている。〈la différance〉と題されていた。このディスコースはこう始まる——

1 Je parlerai, donc, d'une lettre.

De la première, s'il faut en croire l'alphabet et le plupart des spéculations qui s'y sont aventurées.

Je parlerai donc de la lettre *a*, de cette lettre première qu'il a pu paraître nécessaire d'introduire, ici ou là, dans l'écriture du mot *différence*; et cela dans le cours d'une écriture sur l'écriture, d'une écriture dans l'écriture aussi dont les différents trajets se trouvent donc tous passer, en certains points très déterminés, par une sorte de grosse faute d'orthographe, par ce manquement à l'orthodoxie réglant une écriture, à la loi réglant l'écrit et le contenant en sa bienséance.⁽¹⁾

〈Derrida〉がこの部分において、身振りを用いつつ示していることは、まず〈音声言語〉を〈道具〉にし、〈文字言語〉について語るということ、〈文字〉への〈音声〉の奉仕という皮肉である。それは、〈文字〉化されたディスコースによって始めて見えてくるものである。〈音声〉を媒介として、〈文字〉の〈現前〉化をすること。〈音声中心主義〉の階層的逆転。

突然の〈donc〉であった。この身振りは、一体何の意味作用をしているので

あろうか。たとえば、〈Je pense, donc je suis.〉の意識化を狙っていたのか。この定式を介しての〈Descartes〉の意識化か。更に、〈Descartes〉を介しての〈身心〉の二元論か。または、単に〈強意〉的に用いるという慣用法に則った〈疑い〉、あるいは〈皮肉〉。〈文字〉による限り、彼がどのように発音をしたのかは不明である。ここで〈Derrida〉は、自らの〈音声〉のディスコースが〈文字〉化される時のことを計算にいれ、〈différance〉の作用について示すための陰謀を巡らしていたのであろう。それにしても、この〈Descartes〉の定式は、身振りの点で〈Je parlerai, donc, d'une lettre〉に似てはいないか。〈donc〉を挟んで二つの語。〈pense〉と〈parlerai〉、〈je〉と〈d'une〉との音的類似。〈suis〉の不定形 (infinitif) は〈être〉。したがって、この〈être〉と〈lettre〉は音的に結びつく。〈lettre〉は〈l'être〉となる。〈infinitif〉とは、一つの語の〈超越〉的なありかた、つまり〈現前〉。まして、〈存在〉の語に〈le〉が冠されているのである。〈現前〉とは〈文字〉であるという身振りか。〈存在〉もしくは〈現前〉は、〈声〉〈思考〉〈精神〉の問題ではなく、〈文字〉〈行為〉〈身体〉の問題である、というのか。〈penser〉は、ラテン語の〈pensare〉を介してフランス語〈peser〉に通じる。それは、ものの〈重さを計る〉ということ。(〈La question du style, c'est toujours l'examen, le pesant d'un objet pointu〉——*Eperons*。(2) この中の〈examen〉はラテン語〈exigere〉に由来し、〈重さを計る〉。ここから〈penser〉が〈style〉、また〈un objet pointu〉と結びついてくる。)そして、〈parler〉とは〈Articuler des paroles〉〈Exprimer sa pensée par la parole〉(3)と定義される。とするなら、〈parler〉には〈pensée〉が前提化されていて、しかも〈exprimer〉が示す〈内〉から〈外〉への運動を含んでいる。〈Descartes〉の定式には、〈記号〉の介在ということが見られない。それに対して〈Derrida〉には、〈parler〉にしろ〈lettre〉にしろ、〈signe〉の意識が見られる。〈思考〉〈存在〉という〈精神的〉、あるいは〈抽象〉的なことではなく、〈音声〉〈文字〉という〈物的〉、〈具体〉的指向性の表明をしている、と読めるであろう。それにしても、〈Descartes〉の〈penser〉と〈être〉は、〈精神〉の側にあり、〈Derrida〉の〈parler〉〈lettre〉は、〈精神〉と〈肉体〉の両方にふり分けられている、ということに注目しておきたい。

ディスコースの身振りについて言えば、類似の記号連鎖の反復が見られる。それは、決して〈同一〉なるものの繰り返しではなく、反復される度に、〈差異〉が生まれてくるというものである。〈反復〉(répétition)とは、そうした

ものである、とする身振りであろうか。フランス語 <répéter> は、<Redire ce qu'on a déjà dit, ou ce qu'un autre a dit> と定義されている。<déjà> の思想である。実際、<Derrida> がこのテキストにおいて語っていることは、すでに (déjà) 語ったことの反復なのである。自ら語ったこと、あるいは他人が語ったこと。それは、すぐ直前に語ったことの場合も、すでに時が経過した場合のものもある。<Je parlerai, donc, d'une lettre> は反復されて <Je parlerai donc de la lettre a,...> となっている。これは直前の場合の例。(ここに見られる未来形は <現前> の繰り延べの意味作用をおこなう。) そして、<différance> に関する、いわゆる内容は、すでに別のテキストにおいて語られているのである。それにしても、<Derrida> の使う語の連鎖は徹底している。前出の引用に続く次の箇所には、<Qu'on cherche donc à passer telle infraction sous silence> とある。<répéter> の語源 <re-petere> を <aller chercher de nouveau> と、*Petit Larousse* は定義をしている。<de nouveau> (ふたたび) は、<à nouveau> (新たに、ふたたび) ともなる。

- 2 ...Ce manquement à l'orthographe, on pourra toujours l'effacer ou le réduire, en son fait ou en son droit, et le trouver, selon les cas qui chaque fois s'analysent mais reviennent ici au même, grave, malséant, voire, dans l'hypothèse de la plus grande ingénuité, amusant. Qu'on cherche donc à passer telle infraction sous silence, l'intérêt qu'on y mettra se laisse d'avance reconnaître, assigner, comme prescrit par l'ironie muette, le déplacé inaudible de cette permutation littérale. On pourra toujours faire comme si cela ne faisait pas de différence. Ce manquement silencieux d'aujourd'hui reviendra moins à le justifier, encore moins à l'excuser, qu'à en aggraver le jeu d'une certaine insistance.

<すでに> (déjà) 述べられてあることを、<ふたたび> <新たに> <差異> をもって <反復> すること。これは <différance> ということに他ならない。<時> <空間> における <差異> 化なのである。こうして <Derrida> は、身

振りによって記号〈différance〉の出現以前に、その説明をしているわけである。

身振りの読みをさらに続ける。〈Derrida〉は彼が批判をし、〈déconstruction〉の作用の犠牲に供した〈西欧音声＝ロゴス中心主義〉の暴露をしている。Iにおいて、〈une lettre〉が〈la première〉に結びつけられていることについて、ことさらに指摘がなされている。つまり、〈une〉であるものが、〈la première〉であるということは、〈l'alphabet〉(alpha と beta の順序ではじまる体系)のためなのである。この体系が、そのようにしたて上げたのである。〈Derrida〉は〈s'il faut en croire l'aphabet et la plupart des speculations qui s'y sont aventurées.〉と用心深い記号の布陣を作り上げた。〈si〉〈falloir〉がある。〈si〉は〈假定〉を示すし、〈falloir〉のラテン語〈fallere〉はこう意味作用する——1. 落下させる、倒す、すべらせる。2. あざむく、だます、まどわす。3. ある事を果たさない、実現しない、傷つける、害する。4. ある事を偽造する。5. ある物をむだにする、無効にする。6. ある物を気づかれぬようにする、感じられないようにする。7. 隠す、忘れさせる、省略する。8. ある人に見失わせる、秘密にしておく、ある人から見えぬようにしておく⁽⁴⁾。いちいち各項を文脈に当てはめるとことは控えるが、これを見るといかにこの記号がこの文脈にふさわしいものであるかがわかるであろう。(われわれにとっては、1. の〈落下〉の項は後の議論につながり、重要である。) アルファベット文字使用の文化においては、〈falloir〉の作用によって〈l'alphabet〉は体系化され、維持され、自然化されている。〈croire〉は〈Tenir pour vrai〉〈Tenir pour possible, probable〉と定義されているが、この〈vrai〉(真理)に仕立てる作用を行うのが〈音声＝ロゴス中心主義〉というわけである。〈croire〉の語源〈credere〉には〈(金などを)貸す〉という意味作用があるが、これは〈spéculation〉と連鎖をする。それはそこに〈投機〉の意味作用を起こすことが可能であるからである——〈Opération sur des biens meubles ou immeubles en vue d'obtenir un gain d'argent de leur revente ou de leur exploitation〉。つまり、〈投機〉が〈動産〉〈不動産〉に働きかけて、その時〈利益〉を〈転売〉もしくは〈搾取〉によって獲得することを目的にするというのであれば、〈思索〉とは〈物質〉〈精神〉に働きかけるということになるだろう。それなら〈思索〉の〈利益〉〈転売〉〈搾取〉とは何に相当するのであるか。〈現前〉〈真理〉〈ロゴス〉に辿りつけるという〈利益〉か。〈記号〉が〈転売〉〈搾取〉

の対象となるのであろう。この過程において大切なこと、それは〈投機〉を可能にしている〈体制〉が、不変であるということである。〈ロゴス＝音声中心主義〉という〈体制〉は不変であり、その基で〈思索〉が続けられてきたということ。〈Derrida〉は〈aventurer〉の記号を連鎖に加えているのであるが、これは〈exposer au hasard, au danger〉。従来の〈思索〉は、〈a〉を〈la première〉にしている限り、十分にその〈hasard, danger〉に身を晒すことがなかったのである。つまり、〈ロゴス＝音声中心主義〉の〈打倒〉(falloir)までには至るということがなく、〈(ある物を)気づかれぬようにする〉〈秘密にしておく〉という〈falloir〉の作用に身を任せていたのである。したがって、〈Derrida〉にとってなすべきことは、アルファベット第一の文字としての〈a〉を〈croire〉〈spéculation〉するということではなく、それに対して〈parler〉という営為をなすことである。〈articuler〉〈exprimer〉すること。何をか。〈秘密〉にされたもの。それは、〈音声〉を〈危険〉に晒すことである。〈音声〉が、実は〈文字〉である、そういう事態へのアバンチュールである。

〈aventure〉のラテン語〈adventire〉、これに関連した〈adventus〉は〈到来〉〈進軍〉〈爆発〉の意味作用を起こす。また〈avent〉というフランス語は、〈待降節〉のこと。つまりキリスト(神)の〈天上界〉から〈下界〉への〈降臨〉のことである。この異領域への移行は、〈音声〉〈文字〉の間にも考えられるのであって、〈思考〉(神)の〈音声〉(天使)を介しての〈文字〉(地上)に対する支配。そのように〈ロゴス＝音声中心主義〉は定めてきたのである。ところが、〈文字〉(a)が〈音声〉(e)の代わりをして、〈思考〉の領域に侵入してきたわけである。〈Derrida〉は〈l'écriture du mot *différence*〉への〈la letter a〉の、しかも〈cette lettre première〉の侵入であるという。〈Derrida〉の配備した〈introduire〉という記号は、脅威的なものである——〈Faire entrer qq.〉〈Faire entrer, pénétrer une chose dans une autre〉〈Fair adopter par l'usage〉〈Faire admettre dans une société, présenter〉〈(混乱を)惹き起こす〉。〈Derrida〉のいう〈mot〉〈écriture〉とは、〈制度〉のことであり、〈a〉という実に強力なるものがそこに侵入したのである。この事態がいかなるものであるのかを、彼は説明している——〈et cela dans le cours d'une écriture sur l'écriture, d'une écriture dans l'écriture aussi dont les différents trajets se trouvent donc tous passer, en certains points très déterminés, par une

sorte de grosse faute d'orthographe, par ce manquement à l'orthodoxie réglant une écriture, à la loi réglant l'écrit et le contenant en sa bienséance)。〈l'écriture〉とは、単に〈文字〉だけのことではなく、〈文字体系〉のこともである。〈文字体系〉の中で、〈文字体系〉について〈文字〉を連ねていく流れの中でのこと。いや、この〈cours〉は〈経過〉〈流れ〉のことだけではなく、〈cour〉でもある——〈Terrain délimité par des bâtiments sur totalité ou sur la plus grande partie de son périmètre。〉〈Dénomination de certains tribunaux importants; ensemble des magistrats qui les composent。〉〈Résidence d'un souverain; ensemble des principaux personnages qui l'entourent; le souverain et ses ministres。〉〈Ensemble de personnes empressées à plaire à qqn et particulièrement à une femme。〉〈En Belgique, toilettes。〉。ここに見られる意味作用は、後に配置される記号連鎖に連なる——〈une sorte de grosse faute d'orthographe〉〈ce manquement à l'orthodoxie réglant une écriture, à la loi réglant l'écrit et le contenant en sa bienséance〉。〈orthographe〉とは、〈正字法〉のことであるが、それは〈文字体系〉を支配する〈法〉(loi)である。これが、〈a〉の侵入を〈侵犯〉と定めるのである。また〈orthographe〉の古形に〈orthographie〉があり、〈縦断面図〉の意味作用を起こし、それゆえに〈les différents trajets se trouvent donc tous passer, en certains points très déterminés, par une sorte de...〉の記号連鎖が起こると考えられる。〈綴りの誤り〉(faute d'orthographe)とは、その〈体系〉からは単にそのように見なされるわけであるが、じつは〈脱線〉なのであり、さらには〈侵犯〉(infraction)とさえいえる。〈礼儀〉(bienséance)をわきまえない〈野蛮〉と見なされるが、そうであるわけではない。〈体制〉はそう扱いたいのだ。たとえ〈重大〉(grave)〈当を得ていない〉(malséance)としても、こう扱われるほうがまだましである。どうしようもない扱いは、〈最も著しい無邪気な仮定〉(l'hypothèse de la plus grande ingénuité)によって〈おもしろい〉(amusant)と見る姿勢である。(〈hypothèse〉→〈hypothèque〉(抵当))。その姿勢は自らの立場を、全く意識していないからである。その〈仮説〉というのは、〈生まれた時から持っている〉(ingénuité→ingeniosus)ものであると考えられているのである。(〈ingénuité〉は、ローマ法で〈生来の自由〉)。一層困惑をする姿勢は、〈黙って無視〉するというもの (passer telle infraction sous silence)。

たいしたことではない、と扱われること (cela ne faisait pas de différence)。そういうわけで、<Derrida> が戦略として行うこと、それは〈黙って正字法を犯したこと〉 (ce manquement silencieux à l'orthographe) の〈正当化・無罪証明〉 (justifier) をすることでも、〈弁明〉 (excuser) することでもない。そのようなことをしたら、〈文字体系〉の容認をすることになり、自ら自らの行為を、その〈法体系〉によって処置するということにしかならないからである。〈justifier〉の語源〈justus〉の〈jus〉は〈法律〉。〈excuser〉の語源〈excusare〉は、〈ex-〉外へ+〈causa〉罪+-are = 罪を解除する。) そうすることではなくて、〈執拗な戯れを悪化させること〉 (en aggraver le jeu d'une certaine insistance) であるという。もちろん、〈悪化〉とは〈体制〉側から見てのことであるし、〈戯れ〉ということもそうである。〈aggraver〉は先述の〈grave〉と連鎖)。ところが〈dès maintenant〉(目下) という記号を配している。これはどうしたことか。〈今話をする〉ということは、〈現前〉をさせるということではないか。しかし、その〈現前〉の主体というのは、いわば〈真理〉〈神〉〈ロゴス〉などではなくて、〈戯れ〉に他ならないのである。そしてそれは、〈執拗〉 (insistance) にも〈再度 (過失を) 犯す〉 (revenir) ことなのである。

さらに <Derrida> は、用意周到にもこう続ける――

- 3 On devra en revanche m'excuser si je me refere, au moins implicitement, à tel ou tel texte que j'ai pu me risquer à publier. C'est que je voudrais précisément tenter, dans une certaine mesure et bien que cela soit, au principe et à la limite, pour d'essentielles raisons de droit, impossible, de rassembler en *faisceau* les différentes directions dans lesquelles j'ai qu'utiliser ou plutôt me laisser imposer en son néo-graphisme ce que j'appellerai provisoirement le mot ou le concept de différence et qui n'est, nous le verrons, à la lettre, ni un mot ni un concept. Je tiens ici au mot de *faisceau* pour deux raisons: d'une part il ne s'agira pas, ce que j'aurais pu aussi faire, de décrire une histoire, d'en raconter les étapes, texte par texte, contexte par contexte, montrant chaque fois

quelle économie a pu imposer ce dérèglement graphique; mais bien du *système général de cette économie*. D'autre part le mot *faisceau* paraît plus propre à marquer que le rassemblement proposé a la structure d'une intrication, d'un tissage, d'un croisement qui laissera repartir les différents fils et les différentes lignes de sens—ou de force—tout comme il sera prêt à en nouer d'autres.

〈敢えて(危険を冒して)公表(出版)をしたテキストに、少なくとも暗黙裡に準拠をすとしても、許していただかなくてはならない〉という。こうした断りを、何故わざわざ述べてるのであるのか。確かに、〈Derrida〉流のディスコースではある。たとえば、*Éperons* の中でこういう——*Si je ne cite pas ces travaux auxquels je dois beaucoup, pas même Versions du soleil qui me donne ce titre, ouvrant le champ problématique et jusqu'à la marge dans laquelle, à telle dèrive près, je me tiendrai, ce ne sera ne par omission ni par présomption d'indépendance. Plutôt pour ne pas fragmenter la dette et pour la présupposer à chaque instant en sa totalité.* しかし、それだけではない。まず、わたしの話は、既に述べたことの〈反復〉である、ということを示す身振り、と読める。このことは、どこそで述べたものです、とわざわざ言うことはしません、ということ。〈テキスト〉というものは、そうしたものである、また人の発言とは、そうしたものである、言い換えれば〈引用の織物〉である、ということ。しかし、これだけのことを言うためであるのなら、ここにある記号連鎖は存在性を失うであろう——〈devoir-revanche-excuser-référer(sic)-implicitement-pouvoir-risquer-publier〉。

〈devoir〉はこう定義されている——(lat. *debere*) Être tenu de payer, de restituer, de fournir: *devoir de l'argent*. || Être redevable: *devoir la vie à qqn*. || Être obligé à qqch par la loi, la morale, les convenances: *un enfant doit obéissance à ses parents*. ここでまず気づくことは、〈ある人に負債がある〉という意味作用の存在である。これは、既出の〈croire〉〈spéculation〉に連鎖をして、さらに後出の記号連鎖〈*système général de cette économie*〉にまとめあげられる。〈負債〉にせよ、〈復元〉(restitution)にせよ、それは何かがあちらからこちらへと移行をして、

〈不在〉化した空間に何かを〈現前〉させる〈義務(理)〉がある、ということである。しかし、その〈義務(理)〉は果たされずに〈繰り延べ〉されている。しかし、その〈行為〉の〈義務(理)〉化をする何かは、〈現前〉しているのである。それが〈法〉(loi)〈道徳〉(morale)〈礼儀〉(concernances)というわけである。これらが〈強制〉(obliger)をする。人が何かの体制に従っているとしたら、それは人がそれに〈負債・恩義〉を受けているからである。そのお陰を蒙って、生存しえているのである、というわけである。しかし、その〈負債・恩義〉たるや、どのようにして生じたのであろうか。〈体制〉が勝手に作りだしたものかもしれない。〈体制〉が巧みに、その事態に人が陥るように仕組んでいるのかもしれない。〈体制〉とは、〈負債・恩義〉のいわば製造システムなのではないのか。

そうした〈義務(理)〉〈恩義〉の〈返礼(済)〉(revanche)を〈怠る・背く〉(manquement), すると〈復讐〉(revanche)が下されることになる。〈revanche〉とはこう定義される——Action de rendre la pareille pour qqch, souvent pour un mal que l'on a reçu: *J'aurai ma revanche.* || *Seconde partie qu'on joue après avoir perdu la première.* ここにある〈同様の仕打ち(事柄)〉(pareille)から、〈復讐〉とは〈均衡〉の復元をすることであるとすれば、この文脈から先述の〈penser〉〈examen〉(重さを計る)のことを思い出してもよい。この〈秤量〉のイメージは、〈économie〉の道具である。ちなみに、〈天秤〉の象徴は、〈正義〉(justice)または対立物の〈均衡〉である。⁽⁵⁾

〈excuser〉——(lat. *excusare*). *Disculper qqn d'une faute: excuser un coupable.* 〈義務〉の不履行のために〈復讐〉が下される、その際に〈履行〉の代用として〈弁明(護)〉がなされる。しかし、それで〈義務〉が消滅するというわけではないのであって、〈延期〉されるにすぎない。かくして、〈excuser〉とは〈économie〉のシステムの一部をなしているのである。

〈référer〉——(lat. *referre. rapporte*). *Faire rapport, en appeler à: il faut en référer aux autorités supérieurs.* 〈準拠(照会)〉する先にあるものは、〈起源・原因・作主〉などの〈権威〉(autorités)である。そうすることの〈義務〉。ラテン語の〈referre〉にはつぎの意味作用がある——1. 運び去る, 取り返す, 家へ持ち帰る。2. 帰還を告げる, 告げ知らせる, 告げ口〔密告〕する。この他にも意味作用はあるが、これだけでも〈devoir〉〈revanche〉〈excuser〉との関係性がわかる。フランス語〈rapporter〉とは、

まず〈もとの場所に運び返す〉ということ。さらに、〈referre〉には〈(負債を)返(償)還する、支払う〉〈返報する〉がある。また、〈rapporter〉は〈利潤をあげる〉という意味作用まで起こすのである。それにしても、〈家〉というのは〈もとの場所〉なのであり、それは〈起源〉、そして〈権威〉なのである。〈帰還〉とは、おそらく〈脱線〉に通じるし、〈密告〉は何らかの〈犯罪〉を〈権威〉に知らせることであろう。そして、〈referre〉には〈(口頭で)反復する〉があり、これは〈(消失したものを)回復する〉〈思い出す〉〈(似姿によって)再現する〉ことに発展をしていくのである。このあたりの意味作用は、〈テキスト〉の〈存在性〉の方へ傾いたものであるとしてよい。まさに〈Derrida〉は、かつて公表したテキストを〈口頭で反復する〉わけである。それは、〈ロゴス中心主義〉の〈体制〉から受けた〈義務(理)〉〈負債〉などを、〈返済〉するという行為ではない。〈権威〉におもねるということでもない。単に〈思い出す〉こと、それを〈反復〉しているだけのことである。だから、続く次の箇所において、〈rassembler〉というのである——〈rassembler〉: Faire venir dans le même lieu, réunir : *rassembler des moutons*. || Mettre ensemble, accumuler : *rassembler des matériaux*. || Réunir, concentrer pour entreprendre qqch : *rassembler ses forces, ses idées*. この作用というのは、〈超越的現前〉に〈帰還〉せしめるということではなく、どこかの同じ場所に〈集める〉ということ、〈散乱〉したものを〈集める〉ということなのである。

〈密告〉という意味作用は、〈implicitement〉(暗々裡に)という記号に通じている。後者が〈絶対に〉という意味作用を起こすからであり、〈implicite〉には〈(信仰などが)絶対的な〉がある。〈ロゴス中心主義〉は、〈Derrida〉が〈déconstruction〉を起こすまでは、いわば〈implicite〉の状態にあったのである。しかし、興味深いことにラテン語〈implicitus〉には、〈包まれた、隠された〉という意味作用はあるものの、他に〈混乱させる、むずかしい〉という意味作用がある。もう少し辿ってみると、〈implicare〉は〈巻き込む〉〈もつれさす〉〈乱す〉〈無秩序にする〉という働きをする。これはどうしたことか。少なくとも、この連鎖から臭う犯罪(〈excuser〉の〈causa〉)と〈連座〉をしていることになる。実は、〈反復〉によって〈集める〉ということは、〈もつれさす〉〈乱す〉ということなのである。〈権威〉への〈帰還〉ということではない限り、そうなのである。

〈権威〉といえば、〈pouvoir〉がそれを意味作用するのである。まず名詞

としてこうある——*Le fait de pouvoir : je n'en ai pas le pouvoir.* || *Autorité, gouvernement d'un pays : parvenir au pouvoir.* || *Influence, possibilité d'action sur qqn, sur qqch : abuser de son pouvoir; le pouvoir de l'éloquence.* || *Propriété particulière d'une substance, d'un appareil, d'un instrument; grandeur caractérisant cette propriété.* || *Mandat, procuration.* || *Document constatant cette autorisation.* || *Fonction juridique consistant à édicter les règles d'organisation politique et administrative d'un pays, ainsi qu'à agir en justice pour le compte d'une personne.* || *philos.* Ensemble de rapports de force et des processus de hiérarchisation qui, traversant toute la structure économique et politique, assujettissent les individus. この中でとりわけ注目に値する意味作用は、最後のものであろう。〈個人を服従させ、経済・政治構造全体を横断する力関係及び階層化の過程全体〉、つまり〈体制〉。(これは後に出てくる〈pyramide〉に連鎖)。そして、〈propriété〉とある。〈特性〉ということが、まず第一であるが、〈所有、所有権〉の意味作用があり、これは後の〈le propre〉とつながるはずである。

〈risquer〉とは、〈危険に身を晒す〉ということ。この〈危険〉とは何か。〈danger〉のラテン語〈dominus〉は、〈家長、主人〉〈所有者〉〈支配者〉〈あるじ役、亭主〉をさすという。フランス語では、〈seigneur〉に相当するわけであるが、その意味作用はこうである——(lat. *senior*. plus âgé). *Propriétaire, maître absolu, qui occupe le premier rang.* (propriétaire→propriété→propre)。まり、〈危険〉とは自己に抑圧を仕掛けてくるもの、〈服従〉を迫るものなのであろう。〈Derrida〉にとっては、それは〈体制〉〈ロゴス中心主義〉であったということであらう。〈危険〉に身を晒すとは、そうした〈体制〉に自己の立場を表明するということ。

つまり、〈publier〉すること——(lat. *publicare*). *Faire connaître légalement: publier une loi.* || *Divulguer, répandre: publier une nouvelle.* || *Faire paraître, mettre en vente un livre.* この行為は、用例からわかる通り、高きから低きへと流すということ。〈権力〉が〈法〉を〈公示〉するとは、階層化の手立てとしてである。〈権力〉が自らを暴露するというわけではない。ラテン語の〈publicare〉が示すように、〈国庫へ没収する〉こと、〈公用に供する〉ことである。〈個人〉は、〈公〉という名のもとで〈服従〉をしいられる、〈義務(理)〉〈負債〉を押し付けられるのである。〈個〉を〈儀

牲)にするわけであり、それは〈publicare〉の意味作用〈身を売る〉〈淫売する〉に通じるのである。このように考えてくると、〈テキスト〉を〈publier〉することが、〈危険に身を晒す〉ということであることが理解されてくる。ここで注意しておくべきことは、〈texte〉を〈publier〉するというのは、〈法〉を〈公示〉するというのではない。〈publier une nouvelle〉には、そういうところがある。しかし、〈テキスト〉は〈une nouvelle〉ではない。〈身を売る〉〈淫売する〉に等しい営為である。〈テキスト〉は〈個〉の側にあるからである。〈テキスト〉は、〈既に〉(déjà)あるものであるからだ。〈現前〉〈権力〉の〈所有物〉(propriété)ではないからである。しかしこの〈テキスト〉意識は、〈語用体系〉の〈侵犯〉である。〈テキスト〉は〈権威〉と結びついてきたからである——〈texte〉: Ensemble des termes qui constituent un écrit, une oeuvre (par oppos. aux COMMENTAIRES, aux TRADUCTIONS, etc.): revoir, corriger un texte. || Teneur exacte d'une loi, d'un acte, etc. || Page imprimée, écrite (par oppos. aux ILLUSTRATIONS). || Document authentique; ouvrage original. || Fragment détaché d'une oeuvre. || Sujet de devoir. ここでいう〈texte〉とは、〈de l'oeuvre au texte〉のものである。〈Derrida〉にとっては〈commentaires〉〈traductions〉〈illustrations〉へと傾斜するものである。〈本文〉〈本体〉〈原典〉〈起源〉に寄生するもの。〈Sujet de devoir〉(義務の主体)である。

こうした読みを続けていくと、次に到来してくるのは、次なる記号連鎖である。ここで〈Derrida〉は〈je voudrais précisément tenter...〉という。〈個〉の〈意志〉の表明であろう。〈権力〉が〈集中心化〉(rassembler)をするのではなく、〈個〉がそれを行う。それは、決して徹底した企てではなく、〈ある程度まで〉(dans une certaine mesure)であり、〈徹底〉することは〈原理として〉(au principe)〈à la limite〉〈権利の本質的理由により〉(pour d'essentielles raisons de droit)〈不可能〉(impossible)であるという。〈権力〉が〈集中心化〉するようにする、というわけではないからである。〈個〉にそうした〈権利〉はない。これは、〈記憶〉の点で、〈時間〉の点で、〈空間〉の点で、〈不可能〉であるということではない。〈原理〉としてである。この時、〈principe〉は〈権力〉構造に絡めとられた意味作用を回避する——〈principe〉: (lat. *principium*). Ce qui sert de base à qqch, origine, source: remonter jusqu'au principe de toutes choses. (この用

例は、後の〈pyramide〉に連鎖)。また、〈principium〉の関連語〈princeps〉に、〈発起人、創設者〉〈長、支配者、君主〉などの意味作用がある。

〈個〉の〈集中化〉とは、〈起源〉(origine)へと〈高めていく〉ということではなく(〈origine〉の語源〈origo〉は、〈上る、始まる〉の意味作用を起こし、それは〈太陽〉の〈上昇〉である)、〈束〉(faisceau)にすることであるという。〈定義〉こそ、〈体制〉側の表明である。〈限界・境界〉(limite)を定めること。そうではない。なぜか。ここでの目的である〈différance〉は、〈定義〉を逃れる記号だからである。〈語〉でも、〈概念〉でもない(ni un mot ni un concept)。〈faisceau〉の語に〈固執する〉(tenir à)その理由を〈Derrida〉は二つ挙げている。一つは、〈歴史〉を記述する(décrire une histoire)ことではないということ、つまり〈発展段階〉(étape)(=〈市場、交易地〉〈(軍隊の)宿营地〉)を〈物語る〉(raconter)ことではない、という。この〈raconter〉は、定義では〈Faire le récit de, rapporter〉となる。〈rapporter〉(もとの場所に運び返す)が示すように、それは〈もとの場所〉まで段階を辿ることである。それは、〈a〉という文字の〈錯乱、不品行〉(dérèglement)を課した個別の〈économie〉を説明するということになるからであるが、そうではなくて、〈système général de cette économie〉に関わることだから、という。だからといって、これだけの説明では、〈faisceau〉にたいするこだわりの理由はわからない。第二の理由として、〈束〉の存在性の故だとしている。〈texte〉という〈織物〉、つまり〈intrication〉〈tissage〉〈fils〉〈lignes〉〈croisement〉で構成される〈構造〉(structure)をもつことになるからだ、とする。それは、いちど〈束〉になって〈集中〉したとしても、また〈異なった方向〉へと去っていくものである。

〈束〉という意味作用であれば、〈groupe〉でもよかったのではないかと思うが、そうではなく〈faisceau〉の記号が選ばれ、しかもここでの企てにふさわしく(propre)思える理由は他にもある。〈faisceau〉の定義はこうである——(lat. fascis, botte, paquet). Réunion de choses semblables liées ensemble : faisceau de brindilles. || Ensemble d'ondes, de particules suivant des trajectoires voisines. || Anat. Groupe de fibres nerveuses dans l'axe cérébro-spinal. || Bot. Groupe de tubes conducteurs de la seve. || Math. Ensemble de droites, de courbes, de surfaces dépendant d'un paramètre. || Mil. Assemblage d'armes qui se soutiennent entre elles... ◆ pl. Antiq. Verges liées autour d'une hache,

que portraitle lecteur roman. || Motif décoratif, notamment à l'époque de la Révolution. || Emblème du fascisme. ここで大切なことは、まず〈semblable〉ということ。〈束〉になるものは、そうした性質のものでなくてはならない。〈trajectoire〉は、これ以前に〈les différents trajets〉とあった。そして、〈束桿〉である。古代ローマの執政官の権威の印としてあった、という。それには〈hache〉(斧)が出てくる。(〈斧〉の象徴性: Solar emblem of the sky gods; power; thunder; fecundity of the rain of the sky gods; conquest of error; sacrifice; a support, stay or help)。そして、〈verge〉とは〈棒、笞〉のことで、〈passer par les verges〉という表現は、〈〈笞を持って二列に並んだ兵士の間を通過して〉笞刑を受ける〉こと。〈gouverner avec une verge de fer〉とは〈〈君主が国民を〉圧制する〉こと。また、こうある——〈verge〉: (lat. *virga*). Tringle de métal. || Petite baquette de bois ou de métal que l'on peut faire vibrer. || Organe érectile de la coquation, chez l'homme et les mammifères supérieurs. || Instrument de punition corporelle formé d'une baquette flexible ou d'une poignée de brindilles. 〈性交による器官の勃起〉とは、〈hache〉の象徴性と合致している。すなわち、〈faisceau〉の〈束桿〉の〈権威〉の印とは、〈男性〉原理に基づくものである。この〈男性〉〈権威〉〈勃起〉〈太陽神〉は、この後に続く〈pyramide〉へと連鎖していく。そこへ行く前に、〈la Révolution〉という記号、〈fascisme〉の記号は注意するに値する (Doctrines et pratiques visant à établir un régime hiérarchisé et totalitaire.)。〈中央集権〉と関わるからだ。

*

〈中央集権〉の象徴として、〈Pyramide〉がある。〈ピラミッドの出現は、王墓独自の形式の創出によりファラオ(王)を頂点とした中央集権国家が確立したことを示している〉。(6) 〈Derrida〉は〈différance〉という、〈語〉ならぬ〈概念〉(concept→妊娠)ならぬ記号にある〈a〉の、〈différance〉への〈侵入〉もしくは〈挿入〉の経緯を回想しつつ、「単に読者もしくは文法家にショックを与える」ためだけではなく、「書記に関わる問題について書くことにより探究をしているうちに、計算されてきた」という。〈a〉と〈e〉の文字上の〈差異〉(différance)は、純粋に文字上のものであって、発話において

は〈差異〉は〈理解〉できない、〈現前〉してはこない。この〈差異〉を〈無言の印〉(une marque muette)によって記している、という。この〈無言の印〉を、〈Derrida〉は〈暗黙の記念碑〉(une monument tacite)と連鎖させた。その連鎖の理由をこのように説明している——

Elle se propose par une marque muette, par un monument tacite, je dirai même par une pyramide, songeant ainsi non seulement à la forme de la lettre lorsqu'elle s'imprime en majeur ou en majuscule, mais à tel texte de l'*Encyclopédie* de Hegel où le corps du signe est comparé à la pyramide égyptienne. Le *a* de la différence, donc, ne s'entend pas, il demeure silencieux, secret et discret comme un tombeau: *oikesis*. Marquons ainsi, par anticipation, ce lieu, résidence familiale et tombeau du propre où se produit en différence l'*économie de la mort*. Cette pierre n'est pas loin, pourvu qu'on en sache déchiffrer la légende, de signaler la mort du dynaste.

<pyramide> と <a> が連鎖されたのは、<a> の大文字 (capital) <A> の形によるだけではなく、<Hegel> の *Encyclopédie* のテキストと関係があるとしている。(<Derrida> は <capital> の記号を用いず、<majeur> <majuscule> を用いているのは何故だろうか。<majesté> <威厳、莊嚴、陛下> を連想させるためか。) <Hegel> がそのテキストで <記号全体> (le corps du signe) を <la Pyramide égyptienne> に譬えているからである、という。だからといって、何故 <A> と <Hegel> とが結び付くのか。<corps> は <肉体> <屍、死体> という意味作用を起こすが、<Derrida> は *Glas* (<吊いの鐘> の意味作用) において、記号 <Hegel> に戮れを起こしている。その中で、<e> ではなく <a> が現れてくる。

Qui, lui?

Son nom est si étrange. De l'aigle il tient la puissance impériale ou historique. Ceux qui le prononcent encore

à la française ; il y en a, ne sont ridicules que jusqu'à un certain point : la restitution, sémantiquement infaillible, pour qui l'a un peu lu, un peu seulement, de la froideur magistrale et du sérieux imperturbable, l'aigle pris dans la glace et le gle.⁽⁷⁾

〈Hegel〉と〈aigle〉とは、〈音〉的には同じではない。/ε₃el/ と /εgl/ とである。フランス語の音韻体系においては、/ε₃el/ となるのである。〈g+e〉は /s/ となるからである。〈g〉〈e〉〈l〉のアナグラムで、〈gle〉が〈gel〉になることは可能であるが、その変換を〈Derrida〉は〈glace〉と〈gel〉の意味論的一致によって行っている。〈氷〉である。〈Glas〉の〈g〉〈l〉の連鎖の仕方である。そして、〈a〉と〈e〉との関係である。この〈Hegel〉が〈différance〉と連鎖されるのは、単に〈pyramide〉の〈A〉の姿だけによるわけではない。〈Derrida〉の言う〈l'économie de la mort〉と結びつくからである。〈pyramide〉は〈統治者〉(dynaste)の〈死〉(mort)の〈解説〉(déchiffrer)ができれば、それを〈合図〉(signaler)しているという。この石で構築された〈場〉(lieu)は、〈家族〉の〈居所〉(résidence)であり、〈財産〉(propre)としての〈墓〉(tombeau)。この〈場〉で、〈死の経済〉が〈différance〉の作用によって生じる、とされる。〈死〉と〈墓〉(tombeau : monument élevé sur les restes d'un mort. || Lieu où l'on meurt.)の結びつき、〈経済〉と〈財産〉の連鎖はわかる。しかし、〈家族〉の〈居所〉としての〈墓〉が、どうして〈死の経済〉と結びつくのか。少し戯れが必要である。このテキストの英訳者 Alan Bass の解説は、〈tombeau〉はギリシア語で〈oikesis〉であって、これが〈économie〉(oikos (house) + nemein (manage))の派生してきた〈oikos〉と類似しているからである、としている。しかし、それだけではない。〈Derrida〉は〈familiale〉という記号を用いている。このラテン語〈familia〉には、次の意味作用がある——1. 家族, 世帯。2. 僕婢, (一家の)奉公人, 朗党; 奴僕。3. (故人の)資産。4. 種族, 族。5. 隊, 徒党, 一味; 学派。3. の〈故人〉の〈財産〉, とはまさしく〈死の経済〉ではないか。この〈統治者の死〉, あるいは〈家族の死〉ということをも、〈Hegel〉が *La Phénoménologie de l'esprit* の中で扱っているのである。〈Antigone〉と〈Creon〉の物語である。Bass の解説は次のものである——

This [the death of the tyrant] seems to refer to Hegel's treatment of the Antigone story in the *Phenomenology*. It will be recalled that Antigone defies the tyrant Creon by burying her brother Polynices. Creon retaliates by having Antigone entombed. There she cheats the slow death that awaits her by hanging herself. The tyrant Creon has a change of heart too late, and—after the suicides of his son and wife, his *family*—kills himself. Thus family, death, inscription, tomb, law, economy.⁽⁸⁾

<Derrida> は, *Glas* において <Hegel> のこの物語の扱いについて言及をしている。このようにして, <A> と <pyramide> とが連鎖された経緯がわかってきた。しかし, 先に進む前に, もう少し戯れを行いたい。それは <Antigone> と <Creon> という記号と共にである。この二つの記号が <différance> に関与しているのは, <Hegel> との関係からだけではない。まず, <Creon> とは <統治者> という意味作用を起こすのであり, また <Antigone> は英語的に読むと, <anti-gone> となる。つまり <統治者> と <反抗者> の関係が成立する。実際, <anti> は <contrary, against> を表し, <gonos> とは <child, birth> を表すという。⁽⁹⁾ <Antigone> は社会倫理に反する子として生まれたのである。つまり, <Oedipus> と <Jocasta> との盲目的, もしくは暗黙的な近親相姦の結果誕生した子であった。まさに, このことは <différance> を表すものである。それはこの語が <Derrida> によって, <語> ならぬ <語>, <概念> ならぬ <概念> と命名されているからだ。<concept> は <conceptus> を語源とし, <妊娠> の意味作用を起こす。<法> に反した <妊娠> であった。そして, <Antigone> は <法> に反した死に方をする。<Creon> の <自殺> とは, <déconstruction> を想起させるであろう。

<Hegel> といえは, 当然 <Aufhebung> が想起されてよい。この語との関連でいえば, <Creon> は <thèse> で, <Antigone> は <antithèse> にわりふることが出来て, <Creon> は <roi de Thèbes> であったが, <thèse> と <Thèbes> には音的戯れを起こすことができる。この <Thèbes> とは, エジプトの都市でもあった。<Thèbes> は, <Amon> という <神々の王> と呼ばれ, ギリシア人が <Zeus> と同一視した神と関係がある。<Thèbes> は <Nut Amon (city of Amon)> と呼ばれていて, また <the phallic Amon>

は〈the forces of generation and reproduct〉であり、〈his mother's husband〉と呼ばれることがある、という。この発想は、〈Oedipus〉〈Jocasta〉との関係に連らなるのである。〈Aufhebung〉から感じ取れる〈上昇〉のイメージは、〈aigle〉の飛翔と連鎖をさせてもよいが、また〈pyramide〉のものであろう。この〈上昇〉については、後に扱うことになるが、それと反対の〈下降〉を〈pyramide〉において意識しておく必要がある。〈Derrida〉は、*Glas* の冒頭において次のテキストを配している。それは、先述の〈Hegel〉と〈aigle〉にまつわるテキストの、右の欄に平行して配されている——

«ce qui resté d'un Rembrandt déchiré en petits carrés bien réguliers, et foutu aux chiottes» se divise en deux.

これは〈Genet〉のテキストに言及をしているのであるが、この〈se divise en deux〉に注目をしたい。つまり、〈differ〉ということが暗示されているのである。そして、もうすこし下ったところにこうある——

Ily a du reste, toujours, qui se recoupent,
deux fonctions.

L'une assure, garde, assimile, intériorisé,
idéalisé, relève la chute dans le monument. La
chute s'y maintient, embaume et momifie, monu-
mémorise, s'y nomme—tombe. Donc, mais
comme chute, s'y érige.

〈chute〉〈tombe〉の記号に注目。共に、〈落下〉の意味作用を起こすのであるが、〈tombe〉は〈tomber〉であると同時に、〈墓〉(tombe/monument)でもある。〈monument〉とは、〈pyramide〉のことであるが、〈pyramide〉は〈tombe〉である限りにおいて、〈落下〉(tombe/chute)を〈保証〉〈保存〉〈同化〉〈同面化〉〈理想化〉〈立直し〉を行う。それは〈comme chute, s'y érige〉であり、〈dé-con-struction〉の二つの対立する相補的動きを連想させるが、〈落下〉と〈上昇〉を配備するものである。この表現はまた、逆も正しい。かくして〈pyramide〉は、〈上昇〉と同時に〈下降〉をも表している

といえる。この〈落下〉といえば、更に続いて配置されている次のテキストは印象的である——

Peut-être le cas
 (Fall) du seing.
 Si Fall marque le
 cas, la chute, la déca-
 dence, la faillite ou
 la fente, Fall égale
 piège, trappe, collet,
 la machine à vous
 prendre par le cou.

すなわち〈Fall(e)〉。

この〈上昇〉〈下降〉の二つの運動を〈A〉に当てはめるなら、頂点を中心にして、それは左右の運動として表現される。〈con-struction〉から〈de-struction〉へ。つまり〈A〉とは〈Derrida〉の行った西欧文明の分析、暴露、そして全体化の営為〈DeConstruction〉の表現にしうる。〈Derrida〉は、この分析において、〈ロゴス=音声中心主義〉を提示して見せたのである。この中において〈ロゴス〉〈音声〉という概念もさることながら、じつに〈中心〉(centre)という概念が重要とされる。〈A〉とはこの〈中心〉の表現でもある。〈centre〉の語源ギリシア語〈kentron〉は、〈pointe〉(any sharp point)という意味作用を起こす。まさに、それは〈A〉の先端である。人は、この先(尖)端から、例の ÉPERONS を想起してよい——

Distances

La question du style, c'est toujours l'examan,
 le pesant d'un objet pointu.

〈style〉とは〈文体〉であると同時に、〈尖筆〉なのである。この尖筆を〈A〉から読みとるとき、人は二本の線から、先端に向かう上昇の運動を感じ取らなくてはならない。一点への〈集中〉である。あるいは、底無し空間から、せばまり行く空間の上昇。

そもそも〈A〉は〈上昇〉の運動をもたなかった。ギリシア語の〈A/α〉は、すでに尖端を上に向けている。しかし、そのもとのフェニキア文字においては〈𐤀〉という姿をしていた。ギリシア文字でも初期は、そうであつたらしい。ギリシア文字〈A〉といえば、〈the beginning; the First Principle from which all things proceed〉という象徴作用を起こす。それなら、〈Derrida〉の暴露した〈Origin〉〈Presence〉〈Truth〉〈God〉をも表象することになる。そして、〈Q〉との関係において〈A〉は、〈aigle〉によって表象されるという。このとき、〈Q〉は〈owl〉であるという。

このあたりの象徴性は、〈centre〉の行く象徴作用に現れてくる——

centre Totality; Wholeness; absolute reality; pure being; the origin of all existence; unmanifest being; the world axis; the pole; the point around which everything revolves; Paradise; the potential; the point containing the totality of all possibilities; sacred space: a break in space and the point of intercommunication between the three worlds, transcending time and space; an axis uniting the cosmos both vertically and horizontally; the intersection of macrocosm and microcosm; cosmic order; the 'Pivot of the Law'; the point of resolution and reconciliation where all opposites disappear; the Eternal Now; the 'point of quiescent'; the 'unmoved mover' of Aristotle.

ここに出てくる記号の多くが、〈Derrida〉の批判に晒されたものであると気づく。たとえば、〈totalité〉について〈Derrida〉はこう述べている——

...cet index et quelques autres (d'une manière générale le traitement du concept d'écriture) nous donnent déjà le moyen assuré d'entamer la déconstruction de *la plus grande totalité* —le concept d'épistémè et la métaphysique logocentrique—dans laquelle se sont produites, sans jamais poser la question radicale de l'écriture, toutes les méthodes occidentales d'analyse, d'explication, de lecture ou d'interprétation.⁽¹⁰⁾

このテキストのうち、<la grande totalité> を <dé-construction> するために導入された武器が <différance> である。とするなら、<différance> とは <centre> の逆のベクトルを有することになるであろう。まさしく英語でいえば、<defer> と <differ> の意味作用を起こす。そして今扱っているテキストで、<Derrida> はこういう――

Les deux valeurs apparemment différentes de la différance se nouent dans la théorie freudienne: le diffère comme discernabilité, distinction, écart, diastème, *espacement*, et le diffère comme détour, délai, réserve, *temporisation*.

つまり、<A> の頂点（尖端）から左右へと下降していく運動が <différance> である。そして、<A> が示すように、その運動は無限に続くのである。無限への下降。そして、二つの線の無限の離隔。これに対して、<A> の上昇線は、<centre> で合流して、その運動は有限である。あとは、その <尖端> からの飛翔しか残っていない。<超越>。そして、<下降> (Fall) の象徴性は以下の通り――

Fall The Fall of Man is involvement in the material and individual world; man forgetting his divine origin and nature; the loss of Paradise; the congenital duality in man and in manifestation.

こうした象徴性を加味して、<différance> と <centre> の差異を対照化してみる。

| | | |
|----------------|-----|------------|
| différance ↙ ↘ | (A) | centre ↗ ↘ |
| 分離（拡散） | | 集中 |
| 下降 | | 上昇 |
| 無限 | | 有限 |
| 偶然（歴史） | | 本質（超越） |
| 他者 | | 自己 |
| 墮落（不純） | | 向上（純粋） |

| | |
|---------|--------|
| 境界侵犯 | 境界固守 |
| 地獄 | 天国 |
| 物質 | 精神 |
| 死 | 生 |
| 無目的（彷徨） | 目的（定住） |

この対照表は無限に続くはずである。しかし、左側のコラムの項目は、実に右の項を中心にしたとき、抑圧される概念にすぎない。〈ロゴス中心主義〉の裏返しでしかないからである。〈différance〉はすでに〈différance〉を隠蔽している。むしろ、〈différance〉とは両方の運動を同時に含む事態なのである。なぜなら、〈différance〉が〈différence〉を下敷きにしているとするなら、広義の〈différance〉とはこの両方と含むものであるからだ。こうした広義の〈différance〉は、仏法でいう〈空〉に相当する、そうした見方がなされている。この連鎖は Robert Magliola が、その著書 *Derrida on the Mend*⁽¹¹⁾のなかで行っていることである。彼はこういう――

I shall argue that Nagarjuna's śūnyatā (“devoidness”) is Derrida's *différance*, and is the absolute negation which absolutely deconstitutes but which constitutes directional trace. (p.89)

... what we designate as 'devoidness' is the perpetual going-on which *différance*, but which *reinstates* logocentrism...(p.128)

Magliola は〈空〉を〈devoidness〉と訳し、〈voidness〉と区別をしているが、それを次のように説明している――

In fact, I have selected out “devoidness” from the several renderings of *śūnyatā* suggested by translators simply because it renders so well the kind of “working” which is *śūnyatā*. “Devoidness” as a translation evokes negation (the Latin prefix *de* meaning “completely,” so we have “devoid,” or “completely void”); and “devoidness” also evokes constitution (the Latin prefix *de* meaning “away from,” so we have “devoid,” or “away

from voidness”).

これはまさしく <deconstitute/ constitute> の同時運動である。では <空> とは何か。もう少し立ち入ってみる。三枝充恵氏はこのように要約をしている——「あるものがそのものの自己存在＝自性をもたないありかたが、すなわちそのものの空ということにほかならない」。(12) 氏は、その前のテキストで <deconstruction> の運動をしめすかのような表現を用いている——

(そのようななかで、) たとえばそこに火があると、火の自己存在をいかに主張しようとも、それがいかに根拠の乏しいものであるか、そしてさらにそれを強行すれば、ついには自己存在の根拠そのものを失ってしまう…… (p.191)

氏の説明をもう少し詳しく見ておくとよい。氏は、ナーガールジュナの『中論』について解説をしているのである。

『中論』の中心思想は、

縁起——無自性——空

にある。そしてこの軸を基盤にすえて、空はその論理を獲得し、空の意義・ありかた・本質ともいうべきものが、十分に理解されるようになった。

さらにここにある <無自性> <縁起> をつぎのように説明している。

わたくしたちがなにか考えようとするとき、その考えるもの——主体とその対象について、なにかしらそれだけで存在し、しかも動かないでいるものを想定しないと、その考えるということ自体がぐらぐらと動揺して、考えるということさえ不可能なのではないか、という気分になってくる。こうして、実体＝自己存在＝自性は、ものを考えるひとに、ものを考える場合に、つねについてまわる。しかもなお、それを否定したところに無自性がひろがり、空がひらかれる。

その自性を無自性に転換させるのが、縁起 (pratityasamutpāda) という考えである。

この〈縁起〉は初期仏教以来存在していたのであるが、〈無自性〉〈空〉に連鎖されることがなく、その連鎖をつけたのがナーガールジュナの『中論』である、という。三枝氏は『中論』第十章の、「火と薪との考察」（什訳「観燃可燃品」）を用いて〈縁起〉のあり方の説明をしているが、それを見ると人は、〈Paul de Man〉の例のイエイツの詩“Among School Children”を用いた「踊り手と踊り」についての議論を想起するであろう——“How can we know the dancer from the dance?”

いま火が燃えさかっている薪というありかたをみてみよう。私たちはそこに火があり、薪があるという。しかしなら、そのめらめらと燃えているどこからが火で、どこまでが薪であるか、それをはっきりと区別して、ここが火でここが薪だとすることは、なんびとも不可能である。両者は一体となって——両者の区分もできないほどに全く一体化して、そしてそこに火があり薪がある、といわれる。

一体化して燃えあがる前には、火はそこにはない。薪もたんなる木片にすぎず、まだ薪（燃料）とはなっていない。燃えはじめたときに、木片はたんなる木片ではなくなり薪となり、火もまたそこに現在化する。そして上述のように、両者がある点において結合して一体化してはじめて、火があり、薪がある、という。

この火と薪との一体化の姿、それを〈縁起〉の〈相依性（相互依存関係）〉という。これは、〈déconstruction〉に対してなされた批判、〈parasite〉（寄生）ということに対する批判論にとてもよく似ている。この〈火〉〈薪〉の関係を、動的に考察をすると、そこに〈縁起〉の〈相互排除性〉、さらに進んで〈矛盾対立〉のありかた、つまり「縁起のいわゆる逆の形の相依性」にいき着く。それはこういう論理からである。

ところが現実には薪に燃えている火は、決して静止したままではない。火はどんどん燃えさかて行くか、または徐々に消えかかて行くか、どちらかいずれである。この場合、火が燃えて行くとは、薪を減少させていくことである。火が消えかかて行くとは、薪を増大させて行くことである。いいかえれば、火を肯定して行くことになる。すなわち、火と薪との肯定—否定の関係は……一方の肯定が他方の否定に通じて、相互に反対の関係

にある。

この状態が進行していくと、薪はどんどん小さくなる。これは「火を肯定し薪を否定することが進行」することであり、「薪が燃え尽きたとき、薪は完全に否定される」。しかし肯定を押し進めすぎると、薪が不在となってしまうために、「火の存在する場所」がなくなる。そして「火もまた消滅する以外」になくなるのである。これは「肯定の一方的進行がそれ自身の自己否定というありかたで終止符を持つ」ことになった、ことを意味している。また、逆の場合、火が次第に消えかかって行く場合にも、類似の状況が生じる。これは <centre> の押し進めによる <déconstruction> の状況である。<A> の上昇運動は余りにも押し進めすぎると停止し、また <A> の下降運動は無限に続くことでその存在性を失うであろう。すなわち、「相互対立における両者は、対立を残していないかぎり、みずから自己を滅ぼしてしまう結果を招く」のである。おそらく、この <対立> を <差異> と置き換えることによって <différance> へとつながることであろう。したがって、<縁起> の運動とは、「自己存在＝自性の主張を根本から否定して、かえってそれぞれが無自性であることによって、縁起にある諸存在にその根拠をあたえる」ということになる。

あるものがそのものの自己存在＝自性をもたないあり方が、すなわちそのものの空ということにはほかならない。こうして、縁起から無自性へ、縁起から空へ、無自性から空へと論理が明白となり、それによって一切のものが成立することができる。

もし、<空> を <différance> として定立するならば、<différance> とは「一切のものが成立する」根拠ということになる。

つまり、<A> とは <上昇> <下降> との運動が同時に存在するからこそ、<A> として存在しているのである。そのどちらの運動に対しても執着しないこと、それはすなわち <différance> なのである。

*

これまで <上昇> <下降> の概念を用いてきたが、<A> の <différance> の運動はなにも <下降> でなくともよい。また、<centre> の運動は、<上昇>

でなくともよい。そもそも〈A〉は、〈牡牛(ox)〉を表していたという。〈𐤀〉の姿をしていたのであり、それがフェニキア文字では〈𐤁〉となり、ギリシア初期には〈𐤂〉となり、そして後期になって始めて〈A〉として直立する。

GREEK ALPHABET

| WEST SEMITIC | | | | | | | | | | | GREEK | | LATIN |
|--------------|----------|----------|----------|--------|--------|----------|-------|----------|--------|----------|-------|------|-------|
| AHIRAM | RUWEISEH | AZARBAAL | YEHIMILK | ABIBAL | ELIBAL | SAPATBAL | MESAC | ZINCIRLI | CYPRUS | SARDINIA | OLD | LATE | A |
| 𐤀 | 𐤁 | 𐤂 | 𐤃 | 𐤄 | 𐤅 | 𐤆 | 𐤇 | 𐤈 | 𐤉 | 𐤊 | 𐤋, A | A | A |

〈A〉として直立をしたとき、〈上昇〉〈下降〉の意識がそこに生じた、あるいは託されたのである。一体何が起きたのであろう。〈𐤁〉から〈𐤂〉への変化は、まず文字が右から左に向かって書かれていた時代から、左右交互に往復する〈牛耕式〉の段階を経て左から右への書法になったからである。それにしても、直立の理由はなにか。〈ox〉から〈pyramide〉への移行とは何か。

〈pyramide〉の形状の由来は、「ピラミッド・テキストからみて故王が昇天するための階段（階段ピラミッド）、または太陽光線の具象化（方錘ピラミッド）とみる説が有力」であり、「方錘ピラミッドの成立は太陽神信仰（ラー）の確立と関係があり、ヘリオポリスの聖石ベンベンの形状も影響を与えている可能性が大きい」⁽¹⁴⁾という。

確かに〈太陽神信仰〉といえば、〈A〉〈Q〉とは〈eagle〉〈owl〉、または〈day〉と〈night〉とによって表象される。ギリシア神話では、また〈Apollo〉であった。そして、〈A〉のもともとの形態は〈ox〉であったというなら、〈Altar〉が浮かびあがってくる。〈ox〉とはそこで殺される〈犠牲〉である。あるいは、〈Altar〉のラテン語形〈altaria〉は、〈altus〉（高い）を語根としている。それは「高い場所」のことで、そこは信仰の中心（祭壇）である。例の〈上昇〉は〈exalter〉とフランス語ではなる。これは、ラテン語〈exaltare〉（ex-外に+altus 高い+are=持ち上げる）から派生したという。このようにして、〈ox〉は〈altar〉に介在されて、〈piramide〉と連鎖してくる。

〈太陽神〉といえば、エジプトにおいては〈the rising sun〉は〈Horus〉、〈the zenith〉は〈Ra〉、〈the setting sun〉は〈Osiris〉としてわりあてている。⁽¹⁵⁾とするなら、〈A〉の三つの点をそれぞれが分担し、太陽の〈上昇〉

〈下降〉とを運動化するのが〈A〉ということになろう。つまり、〈A〉のようになっては、〈A〉が〈太陽〉と結びつくことは難しいのである。

〈Ra〉は〈創造主 (creator)〉を意味するのであるという。そして〈obelisk〉がそれを表象する。〈Heliopolis〉の神殿の神官は、ここで〈Ra〉が最初に「オペリスクの形をした、石の物体に顕現した」という、とされている。それは〈beben〉と呼ばれるものである。この〈obelisk〉の象徴性は、次の通りである——

Phallic; male generative power; fertility; regeneration; stabilizing force. It is also an *axis mundi* and Tree of Life, a ritual world centre, a 'finger of the sun'. In Egypt it denotes Ra; the ray of the sun; solar generative power.

この〈obelisk〉の象徴性と〈faisseau〉〈verge〉とは連鎖する。また、このペンベンのオペリスクをもつ神殿では、〈Ra〉は通例〈the bull Merwer〉の姿をとるとされる。またときには、〈the bird Bennu〉であるという。〈Ra〉は〈the Bull of Heaven〉として、〈the sky goddess Nut〉と毎日交合をし、妊娠させるとされている。この〈the Bird Bennu〉は次のように〈eagle〉と結び付く——〈(the Bird Bennu) is identified, though not with certainty, with the Phoenix who, according to Herodotus's Heliopolitan guides, resembled the eagle in shape and size, while Bennu was more like a lapwing or a heron.〉⁽¹⁶⁾

かくして、〈OX〉→〈PYRAMIDE〉の移行は、更に〈OX〉→〈RA〉→〈OBE-LISK〉→〈PYRAMIDE〉と分節化することができる。そして、この〈PYRAMIDE〉とは〈RA〉を崇拜し、自らを〈sons of Ra〉と称した〈Pharaoh〉たちの〈tombeau〉であった。この墓、つまり死者の家は、〈pharaoh〉にふさわしい。なぜなら、〈pharaoh〉の語源の意味作用は、〈great house〉。この〈大きな家〉とは、〈死者〉に固定されることはなく、むしろ〈王〉の〈再生〉の母胎である。「ピラミッドは王の遺骸および副葬品を納置すると同時に、現世にあっては神の化身として宇宙秩序 (マアト) をみずからの手で維持し、死後は神々の一員としてこれを保証する存在となるファラオのための供養と祭儀の場」である。また〈再生〉は、〈Ra〉の行為からも生まれてくる。〈Ra〉が年をとるにつれて、人間の忘恩に嫌気をもようして、〈地上〉から去って

〈天〉に移る。その時に、彼は常に規制されることになり、日中十二時間船に乗って、東から西へと自らの王国を旅することになった。このときの運動は、すでの述べたように〈へ〉のものといえよう。そして、注目すべきことは、この巡行のさい、〈Ra〉はその最大の敵〈Apep〉の攻撃を受けるというのである。〈Apep〉は大蛇であり、大ナイルに住み、時々その〈Ra〉の船を飲み込むことがあった。しかし、この〈Apep〉はいつも〈Ra〉の護衛に破られて、〈abyss〉に戻されるといふ。また、この巡行で〈Ra〉は朝には子供の姿で誕生し、成長、そして老いて夜になると老人として死ぬ、という考えもある。つまり、〈死〉と〈再生〉のリズムが付与されているのである。

〈>〉から〈A〉に移行したさい、書きつけられた素材が〈粘土板〉から〈パピルス〉へと変化をしたらしい。この変化にあわせて、当然筆記具も変化したのであろう。しかしその〈A〉の姿の尖端は常に維持されたであろう。それは筆記具の〈économie〉に基づくからである。したがって、常に〈stilus〉は〈centre〉の意味作用を起こしていた。とりわけ〈粘土板〉に〈痕跡〉を刻印するとき、〈stilus〉はそこに〈V〉を刻む。そのとき〈stilus〉は、侵入を進ませればそれだけ尖端から根本に向けて、粘土の表面によって包み込まれる。〈V〉はその状況の記号としうる。〈—〉は粘土の表面である。粘土はそのさいに〈亀裂〉を生じ、まさに〈différance〉が現象する。あるいは、大地に突き建てられた〈Obelisk〉。これはまさしく男女の〈性交〉の姿である。〈A〉はその象徴性を隠している。このようにして、〈A〉が〈豊穰〉(fertilité)を表すというなら、そこには〈子〉が想定されるであろう。〈子〉とは、すなわち〈性交〉の〈trace〉(Empreinte ou suite d'empreintes sur le sol marquant le passage d'un corps, d'un homme ou d'un animal)である。つまり〈文字〉。ところで、〈fertilité〉たとえばラテン語〈fertilis〉は〈fero〉を含んでいるが、その意味作用はおもしろい。例の〈référer〉はこの〈fero〉を持っている。さらに、〈différance〉を〈difference〉と〈deferment〉と英語で説明を加えるなら、〈defer〉は〈延期〉だけでなく、〈(に)敬意を払う、(人の意見に)従う〉〈～をゆだねる、決定を付託する〉という同音意義語を持つ。そのテラン語〈defere〉は、〈de〉と〈ferre〉とで出来ていて、〈ferre〉は〈fero〉なのである。フランス語では〈deferer〉である。ここには〈(人を)告発する〉という意味作用もある。これはどう考えればよいのであろうか。〈différance〉に付託された公的意味作用〈延期〉は、〈現前〉からの〈離脱〉ではなかったのか。つまり、これで〈Derrida〉自身が

<déconstruction>に晒されているのであろうか。そうである。こうした現象こそ、まさしく<記号>の<fertilité>による。

<文字><記号>の深層に、このようにして<性交>のイメージが潜んでいる。したがって、それは極めて根源的にエロティックである。そして、肉体的快楽と連鎖する。だから<Derrida>の指摘通りに、<西欧ロゴス=音声中心主義>が<文字>を抑圧してきたというのであるなら、それは一つには、ここに原因があろう。<知><精神>の<性欲><肉体>の抑圧。<Plato>が<文字>を抑圧したのは、<心>から二重に離れている存在だからとされているが、むしろ<性>の抑圧のためではなからうか。<différance>は<ロゴス=音声中心主義>に従う<語>であるとするなら、それはその象徴であり、そこに対して<A>という<obelisk>を打ち建てたということは、またその存在性を意識化させる戦略であった。それはまた、<ファロス中心主義>の記念碑でもある。

それにしても<性>は何故抑圧されねばならなかったのか。まさに、<différance>の典型であるからだ。こういう言い方は<現前><真理>なき<解答>に相違ない。

注

- (1) Jacques Derrida, *Marges de la philosophie*. (Paris: Minuit, 1972) 以下 'La différance' に関するテキストは、この版による。
- (2) _____, *Spurs/Éperons*. (Chicago and London: the University of Chicago Press, 1978)
- (3) *Petit Larousse illustré* 1982. (Paris: Larousse, 1982) 以下フランス語の定義のテキストはこれによる。
- (4) 『羅和辞典』田中秀央編(研究社, 1970) 以下ラテン語の定義のテキストはこれによる。
- (5) J. C. Cooper, *An Illustrated Encyclopaedia of Traditional Symbols*. (London: Thames and Hudson, 1978) 以下象徴の説明のテキストは、これによる。
- (6) 『世界大百科事典』(平凡社, 1988)
- (7) Jacques Derrida, *Glas*. (Paris: Galilée, 1974) 以下 *Glas* のテキストは、これによる。
- (8) _____, *Margins of Philosophy*. Translated, with additional notes, by Alan Bass. (Chicago: the University of Chicago Press, 1982)
- (9) Adrian Room. *Room's Classical Dictionary: The Origins of the Names of Characters in Classical Mythology*. (London: Routledge & Kegan Paul, 1983)
- (10) Jacques Derrida, *De la grammatologie*. (Paris: Minuit, 1967)
- (11) Robert Magliola, *Derrida on the Mend*. (Indiana. Purdue University

Press, 1984)

- (12) 三枝充憲『インド仏教思想史』(第三文明社, 1975)
- (13) I. J. Gelb, *A Study of Writing*. (Chicago: the University of Chicago Press, 1952, 1969) p. 177.
- (14) 『世界大百科事典』(平凡社, 1988)
- (15) *New Larousse Encyclopedia of Mythology*. (London. Hamlyn, 1978)
- (16) 『世界大百科事典』(平凡社, 1988)